

司会 神道文化会が会の機関誌として「神道文化」という

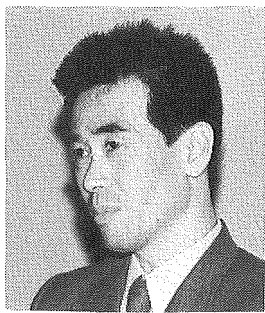
雑誌を出し初めて、年に一度の雑誌ですから今年が四号目になるわけですが、神道文化という言葉にこだわりますと大変うるさいことになりませんが、私どもは日本の文化の根底にあるものは、何らかの意味で神道的な意味や価値を持っているんだと、そう考えておりますので、特に神道の立場がどうだということとは全くお考えいただかなくて結構だと思ふのです。日本という広い範囲でお考えいただいて、テーマに沿ったお話をいただければありがたいと思ひます。第一回目に考古学の、日本の葬儀といひますか、人を葬る問題、墓制の問題についてやっていただいて、二回目が短歌で、三回目が建築といひ、あちこち飛んでおりますけれども、今回、今現在の日本の思想状況、あるいはもう少し広げれば戦後日本の思想状況で、いったいどんなことが中心的な課題なのか、それは教育にかかわったり、政治にかかわったり、いろんなかわりを持っていると思ひますが、そういう問題でご専門の立場から、問題としてお考えになっておられることをお出しただいて、お互いにお話しただければありがたいと思ひます。

ところで読みます神職の人たちが、先生方のお一人、お一人についてそんなに知識を持っているとは思へません。私をも含めて学術雑誌とか総合雑誌を必ずしもそんなに読んでい

るわけではありませんので、初めに簡単に結構でございますが、自己紹介をしていただいて、ご自分では最近こんなことを考えているとか、あるいはこういう問題と取り組んでいるとかという形で、お三人順番にお話しただいて、それから何か個別の問題に入っていきたいというふうに思っておりますので、恐縮ですが寺田さんから。

日本人のアイデンティティ・クライシス

寺田 私はジャーナリズムの世界に籍を置いている人間でございますから、諸先生方の論考やご意見を、雑誌なり単行本なりで出していただくのが本来の仕事でございます。そういう職場で見えてまいりましたことにつきまして、少々お話をさせていただきます。



戦後幾多の評論家や学者の方々が、色々なお考えを述べて来られたわけですが、色々なお考えを述べて来られたわけですが、結局読者に一番問題を投げ掛け、あるいは関心を持って迎えられるものは、日本とは何か、日本人とは何か、あるいは自分たちは今どこにいて、どこに向かって行って、何をすればいいのかというような

テーマであったと私には感じられます。一方、新聞の論調は戦後ほぼ一貫して、日本人は変わるべしという、一種の日本人総懺悔説ですね、そういう論陣をずっと張って来て、現在に至るもまだそれは放棄されていないのではないかと思います。それに対して、反論とか賛同とか、そういう一切を含めて一種の遊撃戦を展開してきたのが、雑誌の存在意義だったでしょう。

昨今、日本が非常に経済的に成長して経済大国とか言われておりますが、それでは国際政治の舞台で日本に何ができて、何をしてきたのかと問われた場合、それに対してこういうことをしてきた、これが日本の立場であったと、一言で総括できるものは何もないのではないかと。典型的にそれが現れて、政府以下右往左往するのみで、なす術を知らなかったというのが、この間の湾岸戦争への対応だったのではないかと思うのです。

経済力のみ肥大して、政治的力量との極端なアンバランスが生じているのが日本の現状です。戦後四十年以上経っても正常なバランスのとれた国家形態を持ってないのが日本の現実なら、今後やはり問題になるのは、日本とは何か、日本人とは何かという形で、一種の喪失してしまった自己自身の恢復、アイデンティティー・クライシスというものをいかに癒し、あるいは再構築していくかということが、雑誌を始め

とする、マスコミの中でもこれから一つの大きな柱となっていくのじゃないかと思われれます。(※小生は雑誌「文藝春秋」ではなく現在出版部ですの)

司会 寺田さんはジャーナリズムとだけおっしゃったんですけど、「文藝春秋」という総合出版社にかかわっておられますから、いろんな思想の立場の人と接するし、あるいはそういう人が書かれたものをお読みになっておられるんだと思いますが、また後程話題が出ました時に、そのことについてお話しただきたいと思います。それでは長谷川さんいかがでしょう。



長谷川 今寺田さんがおっしゃった、戦後ジャーナリズムの場で一番意味のある話題だと思うとおっしゃった、日本とは何かというのはまさに私自身のテーマでもありまして。私の出身は哲学科というところなんです、この哲学という学問は殊に東大の場合、横のものを縦にするというか、理想的には横のものを横のまんまで論文に書けば一番いいのではないかというそういう精神風土の学問でございました。そこを出てから、今もおります埼玉大学というところに十

数年前に就職しました。そのポストというのがいわゆる哲学というポストではなくて、比較宗教学とか、要するに比較思想というポストだったんです。

もともと大学時代にも少し道元のものを読むゼミナールに出ていたりしたもんですから、そこに入れていただいたんですが、そこではじめて、「日本」ということをテーマに考えるようになりました。たまたま私、大学では本当の意味での「師」というものにめぐり合わなかったんですけれども、結婚いたしました、はじめて「師」というものができました。

主人も哲学というものがどういうものであるか、その限界を見極めながら、日本人としてそれをひっくり返していこうということを志してる人間だったものですから、だんだんその下で修行を積みまして、それで私なりに少しずつ、日本人とは何かということを考え始めて二十年たちました。多少見えてきたように思えることと、まだまだ何もわからないことと、わからないことのほうが多いんですけれども。

私なりに一つ大事なポイントというのがつかめたかなと思いましたが、本居宣長の思想を自分なりに読み返していった時に、ここに出てくる「漢心」という言葉が一種の本居宣長のキーワードになっているんですね。それはどういうものかという、「漢心」だから中国文化のことだろう、と思ってしまうと間違いで、本居宣長の場合には直接に中国文化を

問題にしているのではない、日本人の心について問題にしているんです。今、寺田さんが、日本人は変わらなければいけないという、何か一種の脅迫観念のようなものが戦後思想の特徴だというふうにおっしゃったんですけれど、宣長が「漢心」という言葉で問題にしているのは、まさにそういう日本人のメンタリティーなんです。もちろん当時はそれのお手本がアメリカとかヨーロッパ先進国ではなくて、中国だったわけですけれども、その構造には全く同じものがあるような気がしたんです。日本の文化というものは遅れていて、学ばなければならぬ立派な文化は中国文明のほうにあるという、そういう考え方ですね。それに対して本居宣長は非常に鋭く、いったいそんなことを考えていて、本当にわれわれの学問と言えるのかという、そういう疑問を突き付けていったわけです。それを見て、ああもうそこで既にそういうことが問題になっていたのかという感慨と、それからもう一つ、これはひょっとすると、日本の文化を問題にする時に繰り返し繰り返して出てくる問題なんではないか。日本文化とは何かと言われたら、むしろ漢心こそがその特徴なんではないかという、そういう気がしてきました。実際、日本思想というものを少し突っ込んでしらべてみようとすると、必ず、一種の無構造の構造といったものにぶつかる。それが宣長の言う「大和心」であると同時に「漢心」ではないか、と考えたわけなんです。

数年前に、この「漢心」ということをテーマにして論文を書いてみたんですけど、一番真っ先に持って行ったのが「文藝春秋」だったんです。当時堤さんが編集長してらして、八十枚以上もあるのをドサツと持ち込みましたら、次の日電話が掛かってきて、長谷川さんひどいことしてくれるな、この忙しいのに徹夜で読みましたよ。(笑) これは非常に面白いけれども「文藝春秋」というのはスペースが非常に貴重なので、これは「諸君」のほうで載せてあげるからとにかくこのまま文藝春秋社に原稿を置いておきなさいと言って下さって、それで「諸君」からだいぶ前に出していたいたんです。たまたまそんなご縁のある論文なんです、自分でも書きながら、これは難かしい問題だなあと感じたのは、一面で、確かに日本人の心のあり方、日本文化の特徴というのは「漢心」であって、まさにアイデンティティー・クライシスそのものが日本文化のアイデンティティーだというようなところがあ。と同時に、だからこそなおのこと本居宣長のように、あるいは三島由紀夫のように、非常に尖鋭な形でもう一度アイデンティティーを取り戻すということをいつでも考えてないと、とめどもなく墮落してしまうという、そういう二つの非常に難しい側面を背負っているんじゃないかと思うのです。

きょうは恐らくもうちょっとと具体的なお話になると思いますので、その形而上学的な構造という話には多分立ち入らな

いと思いますけれども。

司会 ちょうど寺田さん出していただいた問題を引き継いで、展開していただいたんですが、今現在どういうことに一番関心を持って研究をしておいになるんですか。

長谷川 今のところの研究テーマは、その問題を日本語そのものの「たとえば日本語の文法構造といったこと」から理論的に掘り下げてみたい、ということです。

司会 そうですか。それでは大原さんの場合は、神界の方はほとんどよく存じ上げていると思いますけれども、かえって誤解されてると思うとおられることがあるかもしれないから、この際。

大原 弁明ですか。(笑)

司会 それも含めて、一番関心を持つてることがどういうことなのか、お話しただければと思います。



大原 私は最初は法学を学び、憲法を専攻しました。それから少しサラリーマン生活を過したあとで、國學院に再入学しまして、今度は神道学というまさしく方角違いの学問を学び、別にさほど自分の頭の中で学際的な再構成でき

たとは思えませんが、とにかく現在、日本文化研究所という既存の学部の枠組みから離れたところに奉職し、割合自由に考えさせてもらえる機会を得ていることを、大変ありがたく思っております。日本文化研究所の設立の趣旨は文字通り日本人のアイデンティティーを根源から探求していくということにありますから、今日のテーマにも、合う話ができるのではないかと思います。

今、お二人の話を聞きまして、もう私の言うことは何もなくなってしまったと感じたぐらい、私は全く同感です。寺田さんおっしゃられたように、「日本人は変わらねばならない」という一種の脅迫観念がずっと今日まで、主としてマスコミを中心にして、論壇ジャーナリズムや、アカデミズムにおいて支配的であった。確かにそこには占領軍政策による強制や、冷戦構造への適応のために日本人が変わっていかなざるを得ない自己拘束のようなことがあったことは、間違いないでしょう。

ただ、一方、占領が解除されてからでも今年が四十年になるわけですが、戦後日本人のものの考え方がどのように変化してきたかを見ますと、敗戦による衝撃と占領政策、また冷戦構造の桎梏によるだけではなく、むしろ高度経済成長以降、日本人が豊かになったということが、大きいのではなからうか。恐らく私だけでなく、ここにいる寺田さんも長谷川さん

もそうだと思いますけれども、「日本という国は貧しい国である」という意識を持ったことのある、最後の世代じゃないかと。つまり、われわれよりあとの世代は、日本が豊かであることが当たり前であると認識している世代であると思うのです。これは恐らく日本建国以来、始まって以来の大変な問題でありまして、これは敗戦の衝撃による日本人の価値観の変換よりも、考えてみればもっと大きいのではないかという気がします。

と申しますのは、これまで日本人がずっと持ってきた貧しいから力が弱いから、お互いに手を取り合って協力していくという、という日本人の素朴な倫理や宗教や美意識や人生観の基盤にあるものが、高度経済成長以降豊かになったことによって、必要なくなってしまった。そうするとマルクスではありませんが、「存在が意識を決定する」という意味で、日本の経済構造の、あるいはそれに伴う社会構造の変化というものが、日本人のものの考え方を、目に見えない形で変えてしまっていて、そして現在のように日本が世界で第二の経済大国になっていることを、両手を上げて歓迎しているけれども、そこにこそ実は大変大きな病理があって、日本の文化とか伝統を否定し、その基盤を脆弱化させるような働きをしてきているんじゃないかなという気がします。

先程長谷川さんがおっしゃられましたことで、本当に鋭い

ご指摘だと思いましたのは、日本人のアイデンティティーはアイデンティティー・クライシスを常に意識することにあるということです。それは一種のパラドキシカルな表現ですけども、確かに思い当るところがある。ですから、かつて戦前よく歌われ、国民歌になった歌、「御民われ生ける験あり天地の栄ゆる時に逢へらく思へば」という歌を、奈良朝の一首歌人が詠みましたが、そのような幸せな思いで包まれた日本人がそれ以降果たしていたのかどうか。いつもいつもやはりアイデンティティー・クライシスに苛まれながら、しかしそれがアイデンティティーであるかのように生きて来たんじゃないか。

とすると、話をちょっと戻しますけれども、今日の私たちが、日本とは何か、日本人とは何かということを考えるに当たって、今日のように豊かになってきている、豊かさが当たり前になってきている中で、かつての共同体的エトスを喪失した、個というものがこれからどうやって生きていったらいいかということについて、それを探る手立てがなくなってしまうている。現状をどう考えたらいいのか。まことに難問を突き付けられてるような気がしまして、ちょっとそのあたりが今一番気になることです。特に若い世代を見ておきますと、「お前たち日本のことをよく考えろ」と言っても、彼等が思い浮かべる日本のイメージと、われわれが考えるイメー

ジとは、どこかで大きなギャップがあるんじゃないかということ、最近しみじみ感じております。

長谷川 実は、私も昨日、今日ということが話の話題になり得るのかなということを考えておりまして、いま大原さんのおっしゃったそのことに考え至ると、何かすべて、寺田さんがおっしゃったような話や、私が考えてきたような話を、もう土台から根こそぎ突き崩されるような気持ちがある、そういうテーマなんです。私、その話が出たらどうしようと思っただけ、出ちゃったんで困ってるんですけど。(笑)これは文化のアイデンティティーの問題というより、むしろもっと広い、普遍的な、「文明のパラドックス」と言いますか、そういった問題のように思えるんです。文明というものがその目的を追求していくと、社会自体が豊かになって、(今までのところは大体アンバランスだったり豊かになったかと思うと地震が起こったり、戦争が起こったりして、うまく具合に豊かさを突き崩してくれてたんですけど)その豊かさがそのまんまうまく具合に保たれてしまうと、こんど豊かさ自体がどんどん人間の心を蝕んでいく―それを本当に何か目の当たりにしているような気がするんです。

司会 大原さんの言うような意味、豊かさというものが日本人のもっと深刻なアイデンティティー・クライシスを生んでいるんだという、わからないことないんですが、いわゆる

西洋先進諸国というか、そういうところにある意味で共通する問題のような気もするんですが。ただ、国の文化のアイデンティティーを非常に強く持っているところでは、教育を通じて何が一番肝心なことかということが伝えられているんだけれども、日本の場合は戦後教育が一番肝心な何をとって、日本として何をということがあんまり扱われてこなかった。

むしろそれを批判することのほうが中心であった、というようになそういう特殊条件が加わっていると思うのです。最近の例で言えば、PKO問題で私の一番印象が強いのは、かつてこういう問題が出た時には、特に憲法の制約が出た時には、共産党も社会党も絶対そういうことを議論することを許さなかった。憲法改正なんていう発言を。ところが新潟の上坂さんの問題で、新潟の県庁でさえ詫びを入れて講師料を出したという。あるいは憲法問題を公務員が決して議論してはならない問題ではないという。前に出た時は国会で確か首相まで、法務大臣まで追い詰められて。

大原 稲葉修さんですね。

司会 そういう引っ込み方をしたと思うのですが、今度はそういう展開をしていないということは、ある意味で大きな転換期にきている。それは共産主義体制が崩れたということもあるんでしょうけれども、ところが逆面ではこれも、国際社会に相手にしてもらえない人間になりたいという、ある意味

で非常に情ない真意が根底にあって、外からの力のほうがそういう自分を問う、自分を変えなきゃならないことの原因になっていて、本当に一番最初寺田さん出していたいたような、アイデンティティーというものを自分から問い詰めるという形で出て来た問題じゃなさそうな気がするんですが。もし憲法問題がもう少し進めばそこまでいってくれるんじゃないかという気もしないでもありませんが、そういう言い方はぶち壊してしうか。

長谷川 ちょっと今のお話をさっきのお話から続けさせていただと、つまり一種普遍的な文明の法則によって、そういう問題を論じること自体が無意味になりそうな、余りにも豊かな物質的条件の中に否応なしに入れられているという面がありますね。片方でありがたいことなんですけども。だからこそ他方で、今おっしゃったような、例えば憲法問題というようなことをもったときちんとしたアイデンティティーの問題から、しっかり考え直しておかなくてはいけないということが言えると思います。ですから今われわれがこの場でできるのは、(日本の豊かさを突き崩すというほうはできませんし、またしてもいけないと思うので)しっかりとわれわれなりにつかめるところだけつかんでおかなければいけないーそういうお話のような気がしますね。

ナショナリズムと国語の問題

司会 大きな思想的な問題の中でPKOは盛んに今議論されているんですけども、共產主義体制が崩れたり、あるいは今イスラム世界がどうであったり、南米の世界がどうであったりという、ある意味で昔と同じとは言えないでしょうけれども、ナショナリズムの形で、小さい民族がそれぞれ独立して、政治的独立だけじゃなくて文化的独立を主張するような傾向が出ている。そのことはあまりジャーナリズムが取り上げないのはどういう理由があるんでしょうか。

寺田 というよりも、例えば、ソ連についていえば、ゴルバチョフの登場から、あれよあれよといううちに、よもや崩れるはずがないと思われていたソ連という国がなくなってしまうでしたね。そういう世界的には非常なる変動があったわけですけども、対読者ということから考えると、ソ連という素材はなかなか日本では売り物になりにくい、ああいう大変動があったにもかかわらず、ソ連特集をした雑誌、あるいは単行本、そういうものが爆発的に売れたという徴候はもうないんですね。

司会 それはなぜかということは、どういうふうに分析しますか。

寺田 何が原因でというのは難しいですが、例えば、中国

という問題は永遠に日本人の関心を引き起こすテーマなんですから、ソ連というのは、日本人のロシア嫌いといううなことがあるいは関係あるかもしれない。中国人については、千数百年の交流の歴史があるわけですし、支那学、支那趣味という言葉さえありますね。それに反してソ連というのは全く日本人と身近な接触がなくて、中国に対するような形でのシンパシーを持ち得ないという判断も一つはありましょう。そういう個々の問題について、一々例を挙げて今言えないんですけども、とにかく結果としてソ連ものは売れないという事実があります。だからその伝でいくと、これは中東問題も石油というものがなければ日本人の関心を得にくいテーマだと思いますね。イスラム問題というのはほとんど日本人にはわからない。

司会 それでも今、例えば不法就労の問題で随分イランとかあの近辺の人たちが日本で問題を起こしている、そういうのはこの具体的な小さな事件については結構報道するんですけども、本当に中東問題の本質は何かといったような形では、問題にならないような気がするんですね。

寺田 つまり問題にしない雑誌が悪いのか。(笑)

司会 買わない日本人が悪いのか。(笑)

寺田 紙面に載ってもそれに反応しない読者の対応の故か、それは……。

長谷川 あとのほうが強いような気がしますね。一応よく雑誌とか新聞の紙面でも出てることは出てるんです。

司会 解説はこの頃わりに詳しく出てますね。

長谷川 但し、確かに今寺田さんのおっしゃったように、だから爆発的に売れるというような感じで、人の口の端に上るようなブームになる、というものではないような気がしますね今は。

司会 大学レベルでは、例えば東大がイスラムを、自分の国の神道、かつてあった講座をいまだに復活していないで、イスラム講座を設けましたし、わりに宗教をやる人でイスラム専門の人が持ててるという。五十嵐さんが不幸な目に逢うなんていうようなこともあったりしてるんですけれど、一般にはその影響があんまり、思想の問題とか魂の問題とかという形では、かかわってきてないという感じがですね。

長谷川 というよりは、私は殊に強く感じるののは、一応そういうふうな雑誌とか紙面とかで、「民族」という言葉はわりあい最近見掛けるんです。だけれどもそこで「民族」と言った時には、必ず日本人以外のことなんです。ソ連のアゼルバイジャンの問題だったり、イスラムの問題だったり、あるいはひょっとしてアメリカの多民族主義の問題だったりして。絶対「日本民族」という形で「民族問題」が語られることはないんですよね。

司会 そういう意味では左翼の人がよく言う、ある意味の戦後まだそれは日本人にとってタブーなんでしょうか。

長谷川 ええ、こういう「民族」という言葉の使われ方を見ていると、いまだに「日本民族」という言葉は、世の中に流通する言葉の世界の中で、一種のタブーというか、空白地帯になってるなという感じがしますけど。寺田さんいかがですか、そのあたりは「文藝春秋」あたりだいたい違うと思いますけど。(笑)

寺田 やっぱり大マスコミというのは新聞ですから、とくに新聞の中の代表と言えば朝日新聞ということになっていきますので、朝日新聞の動向と言いますか、紙面の作り方、あるいは論の立て方を見ると、「日本民族」と、「民族精神」とか「民族意識」とか、日本という国についてそういう言葉を使うのは一種のタブーとして、大マスコミにはまだあるんじゃないかと思います。

大原 「ナショナリズム」という言葉が「民族主義」とイコールであるかどうかは別として、「ナショナリズム」という言葉が戦後声高に言われたのは、A・A会議の時でしょう。周恩来とかネールとかスカルノなど同盟諸国のリーダーが、主張した時には一世を風靡しましたけど、日本国内ではナショナリズムはイコール、ウルトラ・ナショナリズムに通じるから、それを使うのはタブーでしたね。その後遺症が今

なお残ってる面はあるだろうと思うのですが、先般もあるところでもナショナリズムといえますか、民族問題について話してほしいと言われて、私はにわか勉強で話したんですけれども、日経新聞の解説記事によれば、要するに世界には七千ぐらゐの民族がいる。しかし現実存在する主権国家は百七十にすぎない。この百七十と七千という大きな落差が民族問題であることになる。数値的にはその通りだろうと思います。

ところが日本をみますと、先程長谷川さんも言われたように、ソ連も中国も東欧諸国も、それからアジア、アフリカ、中近東も、それからアメリカだって皆深刻な民族問題あるいは部族問題に直面している。さらにはそこまでいなくても韓国の場合でしたら地域主義の相剋によって、国家としての統一が時に動揺をきたす。そういう状況がありながら、日本だけがこの問題については全くといっていいほどカヤの外にいて気にしないできている。だから「ナショナリズム」という言葉を聞いても単なる知識にとどまってああそんなものなのかなあという程度で終わってる、それがまた先程言われたアイデンティティー・クライシスを感じるのがアイデンティティーであるかのような、大変平和で恵まれた状況であることの裏返しのような気がするんです。

長谷川 日本人がよその国のそうした民族問題の難しさを聞かせられたとき、おかしいのは、ほかのみんなが悩んでる

のに私だけその問題に悩まされていないのは世間さまに申し訳がないーさあこれから日本人も民族問題を国内で抱えて悩ましよう、そういう非常に奇妙な反応が出てくる。それ位、いまの日本人にはその問題の切実さがないんですね。

司会 長谷川さん、先程日本人の思想の在り方について、それを日本語の問題で今考えておられるということをおっしゃったんですが、それはメンタリティーの問題なのか、生活姿勢の問題なのかわかりませんが、日本語という言葉の構造なり何なりから、そういうことと関連する理由というものが何かあるんでしょうか。

長谷川 理由と呼べるようなものは、なかなか簡単に取っ出せないと思いますし、またあんまり安易に言葉の問題をメンタリティーの問題とむすびつけてしまっただけではないと思うのですけれど。しかし、振り返ってみると言葉の面でも今大原さんがおっしゃったような面というのは、非常にあると思います。たとえば、何で多民族国家でないことがありがたいかという、その最大のありがたさの一つは、国中日本語ですべてわかりあえるということですね。それがいかに日本の全体の文化、社会にとって、歴史的にもありがたいことだったかということーもうわれわれは当たり前のことと思っちゃってるんですけど他の国の民族問題をふりかえると、あらためてそのありがたさを再認識させられますね。

司会　そうですね、アメリカなんかは多民族国家だということ、そして同じ共通の理想を持ってるんだと言っても、言葉の面ではヒスパニックは自分らのある意味の劣等感みたいな、集団で生活してて、ヨーロッパ系の集団でも、イタリア語とか、あるいはスペイン語とか、そういう言葉しか話されてないという状況が圧倒的ですから。

長谷川　そうですね、公立学校だと同じ教室で先生が、英語とヒスパニックで二度話さなきゃいけないように義務付けようとか、そういうことにまで悩まされるわけですから、それはもう本当に悩みの種の最大なものだと思います。

大原　明治時代に文学者が日本語の文体を苦勞して考案しましたけれども、政府は大急ぎで標準語というものを作った。それができなければ、ひょっとすれば、会津と薩摩が手を握る時に、謡曲の言葉を使ったというようなことが、明治維新以後もあったかもしれません。これは一種の近代化の一つの宿命だったかもしれません、それでも割合簡単に共通語らしきものが、できちゃったということは東北の言葉であつても、沖縄の言葉であつても、もともと日本語という枠にきちんと収まりきれぬものがあつたということです、そのことの重大な意味に気づかない鈍感さが気になる。

話は飛びますが、寺田さんにお聞きますが、言葉の乱れということが昔からよく言われます、いつか「週刊文春」で

嵐山光三郎氏が片仮名書きの会社名を全部やめろということ、なことを言っていましたね。いまはやりのＣＩに対する批判ですが、もともと日本語の文法はそんなに変化はないんですが、単語については大和言葉に漢語さらには欧米の言葉が重層的構造をなしている。明治時代には先人たちが苦勞して翻訳し、漢語の造語能力を駆使して新しい言葉を沢山作りましたが、戦後になってきますと日本語の文脈にうまく合うような新造語を作るといような努力なしに、片仮名書きの言葉が氾濫し、浮かんでは消え、また消えては浮かんでは消えて、ずうっときてしまっていますけど、こういう言葉は将来どうなっていくんでしょうね。(笑)

寺田　それはしかし、だれにもわからないでしょうね、量の問題と質の問題と両方あるでしょうし。例えば何十年前に流行った流行語というものが、一世を風靡したにもかかわらず、今そんなことを言ってもだれもわからない。流行語というものは猖獗を極めるのも早いですけど、癈るのも相当早いんじゃないかということもありますから、どの程度それが言葉として残るか、あるいは消えていくかということ、ちょっと判断がつかない。ただ、日本語の構造そのものが、外来語をそのまま文脈の中にはめることによって文章になるということの利点と欠点と、両方がそこに端的に現れているんだと思います。

ただ、外来語をそのままカタカナで表記する安易さが無制限に許されていいはずはないのであって、言語表現には何が正しい表現で何が間違っているか、あるいは格調や品格の問題、雅俗の意志等々の規範意識が存在するのは当然の事です。そこから国語に対する愛情も育ってくるわけで、そこから歴史的かな遣いの史的正統性、論理的一貫性も明らかになってくるでしょう。以前に阪本さんがおっしゃった国を憂えても我々にできるのは、せめて歴史的かな遣いで文をつづる事ぐらいだと言挙げも、大事なことだと思います。

長谷川 中国語だったらば、例えば、パソコンなんていうのを漢字であてはめて音訳するわけですから、とても厄介です。それに対して、日本語には、完全に表音機能だけの文字がある。しかもそれに平仮名と片仮名と二種類あるから、外来語だけ区別して片仮名で書いてしまうという、外来語表記が非常に安易にできる構造というのほもととありますでしようね。

ただ、私もさっきちょっと大原さんがおっしゃったので思い出したんですけど、明治期の日本人の知識人がいろんな努力をしたわけですけど、あの時期の彼らのやった非常に大きな仕事の一つが、翻訳語を作ることでしたね。昨日もちょっと講義で憲法の条文を一つ、第十三条あたりを引いて、この中で日本語でない言葉が幾つあるかピックアップしてみ

ようと言ったら、学生がげんげんな顔で、全部日本語じゃないですかと言うんで、まず、「個人」。これは日本語じゃない。「自由」、これももともと日本語では全然違う意味だ。「權利」なんていう言葉も日本語にはなかったと言って、一つ一つやっていったら、目を丸くしてポカンとしてましたけども。その翻訳語を作るといのが大変な努力だったわけですね。

それには功罪がありまして、翻訳語を作り上げることによって、特にエリートでない日本中の普通の人間が、全部同じだけの教養に浴することができるようになった。横文字の外国語を習得するという特別な手続きなしに、日本語の読める人なら、留学したインテリと同じだけの教養が積めるようになった。これは、一民族として大変強力な武器を得たことであつたと思うのです。ところが、その代わり、今の学生のように、個人とか自由とか權利とか、そういう言葉がもともと外来語だったということが、すっかりわからなくなってしまう。その言葉によって表わされている価値観が、他の文化の価値観なのだということが見えなくなってしまう。違和感を感じなければならぬところで、違和感がなくなってしまうという、功と罪との両方があると思うのです。

そこから考えると今の片仮名の氾濫というのは、ある意味では罪が軽い。もちろん日本語として非常に汚くなったり、軽薄になったりする面はあるのですが、ひよっとすると、使っ

てる本人が、もうこれは五、六年で使い捨てだなという意識で使ってるところもあるんじゃないかと思うのです。ちょうど、いま新しく出ているパソコンの機種も、どうせまた新しいものに取って換わられるだろうとみなが思っているように、新しい片仮名語はドゥーと氾濫するけれども、ごく浅い層でまたザーツと引いていってしまうだろうという、そういう無意識の安心感で使い散らしているのかもしれない。そう考えてみると根本的な、思想的な毒の深さというものは、むしろわれわれが日本語だと思ってる翻訳語のほうにあるのかもしれない、という気もしてるんです。

大原 確かにそうでしょうね。パソコン、ロリコン、エアコン、生コン、リモコン、みな同じコンだけでもとをたどれば違うわけで、多分このあたりは便利だからある程度は残るでしょうが、恐らくお二人が言われましたように、いずれ自然の淘汰がなされるでしょうね。明治に生まれた俗語的な表現は今も残っている。例えば、「牛耳る」とか「野次る」というのは、もともと「牛耳を執る」、「野次を飛ばす」を短縮したものです。だから、「サボる」あたりはひょっとすれば残るかもしれませんが。しかし一時期はやった「江川る」とか、「小津る」は今では全く死語になっていますから、その意味では究極的には大安心していいのかもしれないけどね。

(笑)

司会 アイデンティティーの問題が、基本的にはベージック・トーンのような形で、問題が展開してるんですが、大原さんあらかじめ一所懸命考えて、幾つか具体的な問題書いてきている。

大原 いえ、そんなことはありません、書いてません。(笑)

司会 今現在、あるいは戦後の日本人の思想のあり方というものを考えて、具体的な問題としてこれが今もう少し突っ込んで問題にされなきゃならないというふうに思われる問題は、何かほかにありますか。

大原 先程PKOの問題にちょっと触れましたので、憲法問題について言いますと、かつてはタブー視されていたものが、ここ数年来だいぶ状況が変わってきました、たとえば読売新聞が憲法問題の調査会をつくるとか、憲法を見直す小沢調査会ができるとか、急速に変わってきてるような気がします。但し、これが、外庄によってはじめて表に出て、日本が国際社会の中で多少はいい顔もしたいというような動機が見え隠れし、あまり深く掘り下げた議論じゃないところに、何となく浅薄なものも感じるんですけれども。

これとは逆に、あくまでも護憲を貫くべきだという議論が、先般の湾岸戦争の場合も国際貢献をめぐって出ましたが、「わが国は平和憲法があるからできない」という理想主義の立場に、今なお荷担する人がいることは事実だと思います。

しかしそれを支持する人々の間で、憲法がだしにされて使われているんじゃないかという疑いを禁じ得ません。掃海艇の派遣にしろ、カンボジアなどへのPKO部隊を派遣することにしろ、こういう仕事はいわば国際的3Kなんです。だからどうも国際的3Kを厭う気持ちが潜在的にあって、憲法をだしにして正当化しているという、側面が一方にある。

ですから、これは、先程言いました、豊かさの中で金とか物とかに拝跪するだけで、目に見えない崇高なものに対して貢献しようということが、なくなってしまうている一つの現れみたいなものが、憲法論の中で出てきているのではないか。それは社会党の土井たか子前委員長が、相も変わらず「息子たちを戦場に送ってはならない」とわめきましたけども、実は自分の息子など戦争に送ったことのない戦後育ちの世代の人が、それに何となく同調しているのを見ると、知識として戦争の悲惨な状況を教えられた面はあるでしょうが、やはりそこには何よりもわが身だけが大事だという考えがあって、そのことを正当化するために憲法をもちだしているように思えてなりませんね。ですから憲法問題も、今までのような護憲対改憲という思想上の対立ではなく、別の面も視野に入れないと、議論がどっかですれてしまうような気がするんです。

司会 一般国民の場合は私は初等教育の時代から、ずうっと大学の教養必修としての憲法の講義に至るまで、戦後の戦

争拒否という、戦争は絶対悪で愛があれば平和は維持できるはずだという、人類愛で臨まなきゃならんのだという、その教育が徹底しているような。私は自分の子供を、長男と次男が十年隔ててそのあと孫がまた十年隔てて、学校での平和教育を受けていますので、例えば広島島の映画を見せたりする、それだけはずうーと変わってないように思うのですが。そのことが一番大きな力になっていると思われる。これは間違いでしょか。

長谷川 そういう人たちを引っくり返すのは非常に簡単なんです。つまりこの間の湾岸戦争の時にも、ちらっとそういう論調が微かに見えたんですけれども。つまりそういう絶対平和、憲法九条を文字通りに受け取って、とにかく指一本上げちゃならないというふうに解釈している人を褒めちぎるんです。あなたこそが本当の日本民族主義者だ。そういう、だから攻められてもとにかく指一本上げちゃいけないなんていう憲法というのは、世界中どこにもなくて、日本にしかない。原理そのものとしても、国際法の中にもなければ、どこの政治思想にもない、と言ってやるんです。そもそも、憲法第九条を文字通りに守るというのは、これは息子を戦場にやりたくないというだけじゃなくて、娘を殺されても息子を殺されても私は何もしない、ただ一緒に殺されるだけだということですからね。まさに特攻隊の精神です。もっとも、特

攻隊はとにかく自分が向かって行くんだから、まだ恐ろしさが少ないわけですけど、ただ受け身で死を待つんですからこれは恐しい。これはもう、それこそ本当にこれが大御心なんだからこれを守るといふような、何かそういう支えがなかったら絶対に守れないような、ほとんど宗教的な条項なんで、それを世界に対抗して守ると言っているんだから、あなたは自民党だれよりも立派な日本主義者だといふふうに褒めますと、大体何か青くなってもぞもぞといふことになります。

(笑)

だから、平和主義というのも、結局突き詰めていくとどういふことになるか、というところまで突き詰めると、大体さつき大原さんがおっしゃったような、曖昧な何となく利己的な気持ちでそういうところを担いでれば、一番自分の都合のいい具合になるだろうという楽天的な甘い考えで、憲法第九条と言っているような人たちは、みんなふるい落とされてしまうと思います。

「各々其所ヲ得ル」

司会 戦後五十年近くたって、学制は新制の学校制度ができて、途中で何度か小いじりはしましたけれども、どうも最近文部省も本気になって大学の改革をやらなきゃいかん、大学院の改革をやらなきゃならんという。中心はどうも自然科

学系列の問題であるらしいですけれども、少し文部省が本気になってきているような気がする。新聞紙面なんかでもわりにこの頃大学の改革というようなことを取り上げてると思うのですが、日本の思想のあり方と教育ということで、ジャーナリズムの視点から見ても、何かご意見はありませんか。

寺田 教育制度や学科については複雑な問題がありますので、個人的な体験しか申し上げられませんが、受験したり、授業を受けたりするそういう制度の中に置かれている人間の側から見ますと、どうも教育制度というのはいじればいじるほど悪くなっていくという感じがします。例えば、東京都の場合で言いますと、都立高校なんかは三十年前ぐらい前の時点で言いますと、明らかにほとんどの私立高校よりは都立高校のほうがハイ・レベルだったわけです。それが学校間格差があるというので、それをなくさなきゃいけないということから学校群制度というのをつくって、幾つかの学校を組み合わせでそこへ入る人間を順番に割り振っていった。そこから都立高校の崩潰が始って、今ほとんどの都立高校は、都内の私立高校と比較して、相当惨めな状態にあるのではないかと思います。

司会 ごく限られた高校だけが特別によくて、あとの都立というのは、県立でもそうですけども、一般の県立は非常に悪くなっているというのは事実です。

寺田 今度群選抜をやめて、単独選抜にするというようなことが出ていましたけれども、ちょっともう手遅れではないかと思えますね。(笑)

司会 何か高校以下は絶望的なようなお話なんですが。

寺田 というよりも、要するに人間の能力は全部同じだという発想そのものが間違っているんで、百人いれば算数が得意な者もいれば、国語が得意な者もいる、体育が得意な者もいるわけです。個人の長所、短所、得意科目、不得意科目というのは、自ずから人間が二人いればあるはずで、それを全部同じだというふうに言ってしまうのは間違ひなんですから。

司会 私は戦前ですけれども、レベルが高いと言っている受験校でも一クラスに非常にバラエティーのあるやつが必ずいた、小学校の時からそうだったですね。それが戦後はバースと偏差値的なもので固まり出して、同じ高校でもあまりにも大きな格差が出来てしまった。私の長男の嫁も結局それで高等学校教員を辞めてしまった。偏差値の高い県立の受験校から八年ぐらいたって仕方なしに移されて行ったところが、もう教室に入って授業など女の教師ではできない状況のところだったもので、いくら引き止めても結局辞めてしまいました。そういう状態が出来上がってしまった。これを改革するというのは大変なことだと思いますけれども、今文部省が力を入れてるのは大学レベルだと思うのです。長谷川さんは大

学にいられて……

長谷川 大学でも同じようなことをしようとしているわけでしょうね。もうすでに国立大学というのがちょうど都立が凋落したのと同じようなところにさしかかっています。いまの文部省は、京大、東大、その他少し生き残ってる、それをどうやって引きずり下ろそうかということを考えてるんじゃないかと思えますけど。(笑)ただ、今寺田さんがちょっとおっしゃったように、要するにそういう、個々の制度をいじっていく、それも平らにならそうといじっていくというのは非常に不自然な動きで、その動き自体がいろんな既にあるものに壊していくということーまさにその通りですね。つまりもともといろんな上下というばらつきがあるんだということ、その事実を見まいとする。あるいは見てしまったらそれを壊そうとする。それはもう戦後の教育だけに限らず、何かありとあらゆる分野に関して見られる、共通した動きのようないきがいたします。とにかく上下というふうなものがあると我慢できないという、その戦後の風潮の特色が一番悪い形で現れるのがフェミニズムじゃないかと私は思っているんですけれど。(笑)

司会 ああそうですか。私はフェミニズムの闘士を何人か知ってますけれども、それほど悪い意味では理解していないんです。教育の面でそういう傾向を除去することができない

のは、教師がそういう考え方をしているからなのか、文部省がそういう考え方をしているからなのか、父兄がそういう考え方をしているのか、そういうことについてはどういうふうにお考えですか。

大原 それは全部みんな相関関係があつて、だれがどうだというんじゃないくて、山本七平流に言えば、戦後の空気の中ではそれが当たり前というふうになつてきてるんじゃないです。

司会 しかし現実はいい学校に一貫教育の私立の幼稚園から、どこに入ればどこの小学校、そこからずっとエスカレーターで優れた子供たちばかりの中で、自ずから優れた者になるという、それを選択することに必死だということは、盛んにジャーナリズムで言われるわけでしょう。国民一般がそれを求めていると思われるのに、そういう特徴は出てきてるわけでしょう。

大原 戦後の教育制度の改革を見ると、戦前は義務教育は小学校まででしたが、選択肢ははるかに多かった。小学校で終わる人、高等小学校まで行く人もおれば、中学校から旧制高校へ進学し、大学に行くというコースがある。しかし、それだけではない。中学校に行かず、師範学校へ進んで教師になる人もおれば、幼年学校や中学校から、陸軍士官学校、あるいは中学校を出て海軍兵学校へ行く人もいる。このように

バリエーションがあつたのに、戦後は画一化してしまった。小学校、中学校は義務教育になって、進学は高等学校、大学という単線的なシステムになってしまったため、東大を頂点とするピラミッド型の体系が出来上つてしまい、そこに有名校を目指す受験戦争が一層激化し、教育そのものを根本的に歪めてしまった……。

司会 みんな同じでなければならぬという思想は、やっぱりアメリカが教えたんですか。

大原 それはアメリカですよ。(笑)

長谷川 もうまさに、アメリカ製日本国憲法それ自体が、その精神に則つて出来上がつてゐるわけです。権利において平等であるということ。それがそのまま、「平等でなければならぬ」というイデオロギーとなつて蔓延する。一方で、人間である以上少しでも人よりよくなりたいという自然の気持ちがあるのを、その不自然なイデオロギーが抑えるから、逆に今おっしゃつたような非常に無理な、激しい競争になるんですね。

大原 そこで思い出すのがルース・ベネディクトが『菊と刀』の中の第一章で批判している「各々其ノ所ヲ得ル」という言葉です。彼女はこれは日本の前近代的な階層秩序を表現していると言っているのですが、それは全く浅薄な理解です。この語の初出は、多分明治天皇の「維新の御宸翰」だと思い

ますが、その後、確か三国同盟成立の詔書で、「万邦ヲシテ各々其ノ所ヲ得サシメ云々」と拡大されたことで、あの時代の文脈で読むと異論が出るかもしれません、もともとこれは「五ヶ条の御誓文」の、「官武一途庶民に至る迄、各其志を遂げ、人心をして倦まざらしめん事を要す」を受けての言葉で、人生観や趣味や資質のちがう一人一人の人間が「各々そのところを得ればいい」という発想と理解すれば大変含蓄のある内容です。この思想の原典がどこにあるかわかりませんが、ベネディクトが指摘したように、戦後においては、根底から否定されたんでしょうね。

司会 それを否定する時の考えは、近世の身分社会のような社会で「分を知れ」というような言い方を否定したので、戦後の思想は各々個性を最大限に伸ばすという言い方でそのことを主張しているのだと思うのですが。ところがそれを「ところを得しめる」というのは「分を知れ」ということで身分階層を擁護する思想だから、これは封建思想だという否定の仕方をしたんです。

大原 その理解が間違っている。そもそも封建思想否定からきているのだから……。

長谷川 つまりそれぞれの個性を生かすというのと、今大原さんがおっしゃった「各々そのところを得せしめる」という、この二つは全然大本が違う哲学から出てるんですね。

それこそ何か一氣に哲学的な日本文化の根幹みたいなところにお話が飛び込んだと思うのですけど、私もまさに「各々そのところを得せしむる」という言葉はとても重要な言葉だと思ってます。さきほどは、日本文化について、いわば消極的なかたちで、こうでないああでないという話ばかりしたんですけれども、もし何か積極的なものを取り出してくるとすれば、その「各々そのところを得せしむる」というのは、その根元になるべき大事な考え方だと思うのです。だからそれを真つ先に第一章に取り出したというのは、ある意味ではベネディクトの鋭いところでもあったと思うのですけど。彼女はそれをヨーロッパ流の近代哲学からしか考えられなかったから、だからそれぞれの身分に固定されるという否定的なところしか見られなくて、ただのヒエラルキーと解釈してしまっただんですね、本来それは、上下という形であらゆる位置関係を換算しないと気が済まないという、そういう価値観から全く自由なところで初めて成り立つものなんですね。それを戦後の教育にしても憲法にしても、全く見失ってるんじゃないかと思います。

司会 私はあんまり立ち入ったことを申し上げるのは遠慮したいんですけれども、神道という言葉はあんまり出たくないんですけれども、日本人の一番根本にあるのは、西洋流の普遍的な絶対真理の下に、個別が平等であるという考え方

じゃなくて、むしろ個性の中に一番貴いものがあるという、そういう考え方が基本にあったのが、明治以降普遍性の中にそれが埋没するというか、あるいは否定されるというか、そういう形で、個人が個人として自分の本当のありたいやり方で生きようとするのが、見失われているのが一番大きな問題だという。逆にドイツなんかの場合、シュー・マイスターなんていう、靴屋さんでもおれは靴作りのマイスターだと言う。平気でギムナジウムじゃなくて、日本で言えば職業学校に当たるところに、小学校から出て次にサツと喜んで行きますね。それで別に大学に行かないということを恥ずかしいと思わないという、そういう心が日本人になくなって、みんな大学に行くんだという、そういう考え方になってしまったことを、それがいいじゃないかなのか、どうすればそれを良くすることができなのかですね。

大原 難問ですね。

司会 難問に違いないんですが、そんなことをだれも大上段振りかぶって、これしかないなどとは言えないと思いますけれども、こんなことを考えるんだがという、寺田さんいかがですか。

寺田 大学へ行かなければ社会的成功者になれないという発想があるのではないでしょうか。これには職種の問題や収入の問題が大きく作用しているとは思いますが、基本的に大

学をめざす人は、ほとんどサラリーマンになるのでしょうか。

さきほどの話と共通していますが、要するに三Kは嫌だ、という発想ではないでしょうか。何か別の線が考えられるとすれば、それはさっき大原さんがおっしゃったように、複線化ということしかないと思うのです。つまりそれぞれがやりたいうことをやってそこで楽しめる、あるいは生きがいを見付けられるということが、さっきの「各々そのところを得さしめる」ということだと思えますけれども。そうするためには今度は自分が楽しめるものを見付けなければいけないわけで、それをどうやって見付けるかということはまだ非常に大問題で、それが見付けられないからモラトリアムなどと大学生になっても言っているわけですけれども。

長谷川 たとえば、確かにイギリスなんかでも、自分はここで満足だという、そういう階層の人々というのは必ずいますね。そういう社会というのはわれわれから見ても、ゆとりがあつていいなと思う面もありますがもし日本がずうっとこの百年間そののんびりさでやってきたら、明治からこれだけの短い期間で、これだけの強さになることはとうてい不可能だったろうと……。

大原 ひどい停滞でしょうね。

長谷川 もうそれを親父は一介の百姓でも、息子は帝大を出て大臣になれるんだという、そのジャパニーズ・ドリー

ムの力で（その点では本当にアメリカと同じような形で）日本がこれだけ強くなってきたという面はあるんですね。確かにのんびりとしたヨーロッパ型の社会が羨ましい、懐かしいという面と、しかしそれでは、日本は多分今ももっともっと惨めだったろうなという気持ちと、両方ですね。

大原　そういう意味では戦前は「富国強兵」でした。遮二無二日本の自主独立を守るということでやってきた。その行き着いた先が試行錯誤を重ねての惨澹たる敗北だった。戦後はまた一から出直して、今度は「強兵なき富国」でやって、世界第二の経済大国になった。今おっしゃられたように、余りにも常識的ですが、結局物事に、功罪相半ばということではないですか。

話を転じますが、「各々其ノ所ヲ得ル」ということをもう少し考えてみますと、先般亡くなったハイエクは、市場経済がアダム・スミス流の「見えざる神の手」によって予定調和が約束されることをやはり考えていた。彼はクリスチャンではないですが、家は確かカトリックですから、一神教の世界に生きていた人であることがそこからも窺われます。

日本の場合には、一神教的世界ではなくて多神教的世界ですね。従ってそれは、超越神の合理的な意志と摂理に基づいて、宇宙の秩序が保たれるというような発想ではなく、世界は八百万の神や、無数の精霊がアトムのように飛び交って、混沌

とした中で、ダイナミックに秩序が形成されていくプロセスであるという発想です。そこには一神教的世界のように演繹的な手法ですべてを説明できない面がありますが、逆にそこには生き生きとしたダイナミズムが生まれ、ドグマに陥らないで済むという点がある。このあたりが神道の問題にかかわるかもしれません。このあたりが「各々其ノ所ヲ得ル」をこの点に重ね合わせますと、多神教的世界、すなわち多元的な価値がお互いに共存できる世界だからこそ、「各々其ノ所ヲ得ル」ことが可能になる。つまり、その根源的基盤になってるような気がします。このような発想はこれから先の世界のあり方に何らかの貢献ができないだろうか、と思ったりします。

司会　発想の転換ということから言いますと、アイデンティティーを本気になって問わないところに、日本人のアイデンティティーみたいなものがあるという、その出発点について批判的にものを考えるという形で、日本のことを考える人たちは、常に対社会的な発言をしてきているけれども。結果としてあれだけ叩きつぶされた日本が、経済大国と呼ばれるようになって、私なんか別にどうしてそんなに日本が本当に経済大国かしらと、よくわからないんですけど。世界からやいのやいの、もっと国際的に貢献しろと言われているという、結果的な事実を見るとそんなに憂うべきことじゃなくて、むしろそれぞれ日本人が努力してきたから世界が、アメリカ

でさえ指導力を失う状況になってきて、一つのソ連は崩壊するという、ドイツも怪しくなってきたという状況の中で、なお日本にと求められてる状況があるということは、この形をむしろ進めていくことが、本来の日本のあり方を進めることになりはしないかという、逆の引っくり返した考え方はできないでしょうか。

長谷川 この形というのは。

司会 今のような、本当に肝心な中心になるべき思想がないと思われてる状況が、実は一つの型にはめてみんなを引っ張っていくという形じゃなくて、それぞれの日本人の努力の結果として生まれてきているもので、そのことが結果として世界に貢献を求められる状況まで日本を持ってきたんだという。

長谷川 今の形は要するにただ、金持ちにたかっけるというだけの形ですからね。

司会 そういう形であるというふうに理解するわけですか。

長谷川 つまり、さっき、もともとアイデンティティー・クライシスという形がアイデンティティーそのものであると言いましたけれど、同時に、だからこそ、それと背中合わせに、そういう難しいアイデンティティーの形をどこまでもアイデンティティーとして求め続けていくということが大事ではないか、と言ったわけなんです。それを手放してしまっ

みんな何かとにかくちやほやしてくれるし、まあこのまんまでもいいんじゃないかと放っておいたのでは、要するに思想的な意味では単なる墮落ではないかという気がするんです。

司会 本当の意味のアイデンティティーというのは、そういう努力を必ず伴うものだ。

長谷川 そういうことです。私は哲学者ですから、いつでもそれとにかく思想的にとらえ直すというのはどういうことかというふうに考えているんですけど。今、大原さんがおっしゃった、それこそ日本の神道の中に現れているようなそういう思想のあり方というのは、一神教的な思想のあり方と全く違ってる。その違い方は何なのか、果たしてそれが普遍性を持ち得るのかというお話ですね、そのお話の中でもまだ出てきていない一つ大事なことは、たぶん、「各々そのところを得る」というその「ところ」ということだと思えます。つまりそれは広く広げて言えば、世界中の各地域のそれぞれの地域の在り方というものを、いかに壊さずに、いかに本来のあり方で発揮させていくかという、そういう大きな問題につながると思うのです。その「ところ」というものが、神道の場合にも非常に大事だと思うのです。それぞれの土地にそれぞれの産土神というものがある。その考え方というのはまさに一神教の場合には、全部一刷毛で洗い流されてしまふものですね。だからヨーロッパ人たちの世界支配というの

は、いつでも自分たちのやり方をただどんなところにも押し付けていくというやり方だったわけですよ。

これから日本が中心になって新しい世界秩序というものを考えていくとしたら、大原さんがおっしゃったように、それぞれのところというものの、その個性を発揮させていくということになるでしょう。西洋人はそれを混沌とかカオスとか呼ぶかもしれないけど、われわれの見方からすると、それは決してカオスじゃなくて、それぞれの「各々のところ」を発揮させていくことになるんだと。それを実際の国際秩序の上でどう調停していくかということは、多分これから全く新しい問題になると思うんですけど。そういう積極的な形で考えてみれば、われわれの日本的なアイデンティティーを、世界に向かって主張していくということは、決して夢ではないという気がします。

大原 だから、日本人は顔がないとよく言われますけれども、何か新しい理念を日本人が独自に打ち立てて出すことが「顔」になるというのだったら、出す必要はないし、出せない。そうではなくて一つの新しいパラダイムとして、こういうような発想が日本文化の中にあるということを主張することはできる。これこそ日本人が独自に考え、これまで大事にしてきたものであるというような形で出すことは、本当に日本人の顔らしい顔を示すというふうになるんだと思いますね。

日本人が主張すべきこと

司会 寺田さんいかがでしょう、それはアラブなんかは盛んに西洋文明に抵抗して、自分たちの文明、文化を守ろうという、政治的にも精神的にも主張しているように思うのですが。日本人にはそれこそそういう意味でのはっきりしたアイデンティティーがなさすぎるから、日本を外国に通用するような普遍的なものになりたい。あるいは日本文化を外人に、こんな価値のあるものがあるという、知らせたいと言っていないが現実にはほとんどそういう、特に政治面ではそういう役割を果たしていないという事実があるような気がするんですが。

寺田 アメリカが描いているような世界構想を、日本が今現在何らかの形で示せるかというと、それは無理でしょう。「大東亜共栄圏」以上のものはおそらく今でも出せないのではないかと思います。では何を主張できるのか、ということですが。

日本というのは不思議な国でして、中公文庫で『鉄砲を捨てた日本人』（ノエル・ペリン著 川勝平太訳）という本が昨年出ました。非常に面白い本なんですけれども、要するに種子島に鉄砲が伝来したあと、アツという間に鉄砲の大量生産に成功し、しかも西欧の如何なる国にも勝る鉄砲使用国に

なったというのです。長篠の合戦では、信長の三千の鉄砲隊が武田の騎馬軍団を粉碎しました。これより二十年後の、スコットランドのグレンリビットの戦いは、長篠の合戦と比較すると明らかに中世的様相を帯びているという事です。そういう技術革新というものと日本人とのかかわりというのは、今のアメリカともめております半導体の問題等の先蹤となるものではないでしょうか。この本には他にも面白い事が書かれております。戦国時代から江戸時代の初期にかけて、例えば、イギリスあたりでは大抵の人が服の袖で鼻を拭いたりしていたのに、日本人だけが鼻をかむための専用の紙を持っているというのです。つまり懐紙なんですね。それをしかも惜しげもなく捨てる。鼻をかむという目的のためだけの紙を持っているというのは、当時のヨーロッパ人に驚異をもって見られているんですね。この他にも、日本人というものは、よく風呂に入る清潔な人種だと、他のアジア人と比較した宣教師の観察等もありますから、こういう一種の清潔感というものは、どうも日本人の属性の一つであるらしいのです。

司会 今でも向こうの人は手鼻平気でかみますしね。(笑)

大原 中国人は痰を吐くしね。

寺田 もう一つ、アジアの中の日本という事で言っておきたいのですが、二、三年前に、韓国の国立歌劇団とでもいべき公演を見た事がありました。それは民族歌唱であるパン

ソリと、鉦や太鼓の伴奏で舞を舞うのですが、私はそれを観ながら、しきりに能を思っておりました。というのは、その舞踊がダイナミックさのみが目立って、洗煉さに欠けるものだったからです。むしろ原始的な生命力の謳歌であって、洗煉という意識は眼中にないようにさえ見うけられたのです。一方、能という藝術には、原始的な生命力の奔騰は抑えに抑えて、動作もきりつめた果てに自ら現出する本然の勁さと美しさ、そういうものを求めようという美意識があるように思われます。それが日本人が考える優雅であり、洗煉という美意識でしょう。伝統的な支那人の文化や美術を見ても、光輝ある支那文化の表現するものも亦、粘着力の強い生命力の謳歌であって、洗煉とは一味違うものだといってよいと思います。そういう意味で一口にアジアの中の日本といっても、民族それぞれに肌合いの違いは確かにあるのです。日本文化を理解するキーワードとしてこの清潔と洗煉とは重要だと思っています。

大原 今の寺田さんのお話に出た清潔感ですが、日本人が清浄な価値を尊ぶというのは、神道の一番の根源にあることだとよく言われますね、日本の半導体産業が世界一になったのは、ずばぬけた品質管理にある。とにかく不良品を少なくするために、一日に何回も何回も体を清めて清潔な衣服を着て、繊細な神経で注意深く作業にあたる。これが半導体の技

術を飛躍的に向上させた一番のポイントだそうですね。それがさっき言いました日本人の伝統的な体質ならば、技術に対する好奇心とともに、この性向も固有の精神的土壌にあるんでしょうね。

長谷川 それと清潔感が実現できるだけの技術力ということですね。日本の戦後だけ見てる経済評論家たちというのは日本の戦後の奇跡とかなんとか言うわけですけど、『鉄砲を捨てた日本人』にもでてくる鉄砲伝来あたりの日本を見てみると、要するに日本人というのは、そういう技術力というか、新しいものを取り入れていく力というか、そういう力が、それこそ民族的特性としてあって、二十世紀後半はそれをフルに全開にした時期だったという気がします。日本にとっては別に特殊な時期でも奇跡でもなくて、日本らしくやってみたら、世界中を追い越してしまっただけという。

司会 明治維新の研究やってる人なんかは、大体それは江戸時代の職業階層による技術の特殊化、専門化といったようなことが、それを維新後の西洋文明を受け入れる土壌をつくったんだというような言い方しますけど。もっと遡れば、銅鏡にしても銅剣にしても、直ぐパッとコピーを作って自分の力で作り出す力はあったわけですね。

しかし考え方によれば、それも渡来人の影響があったからできた。もともといた日本人にはできなかったんですね。明

治の場合でも実際には明治二十年代で軽工業が盛んになってきた時に、昔ながらの職人たちは、ほとんど役に立たなくなってる。蔵前の職業学校が、今の東京工大ですけど、あれができたというのはそういうのじゃもうどうしようもなかったからです。

戦後のことでも確かに技術がたくさん取り入れられて、最高度の技術と言われますけども、この間のアメリカのハネウェル社の、山武ハネウェルという日本で昔あったですけど、カメラのあれを見てわかりますように、日本のミノルタだけじゃなくて、全部が一種のパテントを知らない、そのまま使ってるという。これ統計的に見ても現実に日本が優位性を保てる産業というのは、アメリカに対してほとんど三つか四つなんです。あとは圧倒的にまだまだアメリカのほうが優れている。ただ、それがよく知られてない。これはもうこの頃専門の経済家、評論家とか、長銀の調査部なんか盛んに言ってますけれど、現実に東北大の学長の西沢さんなんかも、本当に日本の技術はまだまだ浅いし、力入れられていない、どうしようもない、もっと力をつけなければと言ってます。

やっぱり日本人はそういう意味での謙虚さを持たないと、松下もしょせん真似した電器で、(笑) もちろん技術の問題というのは真似るということ。学ぶも真似るのかもしれないですけど、もうちょっと日本人謙虚にならないと、なんで

江崎さんとか、あるいは利根川さんも含めていろんな人が出て行かざるを得ないのかという問題は解決されない。なぜ文部省が、特に技術系の大学院充実を目指しているのか。現に大学院に進む学生が、東南アジアからの留学生のほうが日本人よりも、東大などでも多くなっている。そのうち研究者が育たなくなるだろうと、大変な危機意識を持っていて、われわれのような素人は日本の技術がすごいと言ってますけれど、実際に最先端に立っている人たちは、いかに自分たちが危ういところにいるのかを憂えている。コンピューターの技術者にしたって、現実にあと十年後ぐらいには数十万人じゃ足りないということは、わかりきっていることなんです。素人ぐらいのワープロとか、ちょっとしたプログラミングぐらい私らでも作れるんですが、考えも及ばないようなレベルで今働いてるその人たちを育てるシステムとか、あるいはそれだけの基盤というのは、日本はものすごく弱いんじゃないでしょうか。

長谷川 それは今おっしゃった豊かさ症候群と言いますか、そういうものにもかなり影響されてるところが多いんじゃないかと思います。理工系の学生が足りないというのは私たちもよく聞く話で、理科系の学生が足りなくなるというのは、今おっしゃった技術の層ができていけないということの諸悪の根源になってるわけです。その理科系に学生が行かなくなっ

てる最大の原因が、同じ大学で文科系の学生は遊んで暮らせるのに、理科系の学生というのは朝から晩まできつい実習があって、要するに辛抱しなければならないということなんです。それでみんな同じ稼げるんだったらというんで、文科系に行ってしまうという。

司会 大変みたいです。群馬大学の工学部というのは、ある分野ではものすごい世界でも最先端をいくような技術、その教授がいるんですけれど、結局あんな田舎の大学で汚い設備で、朝の八時から夕方夜遅くまで実験とかやってるのはとても耐えられないというんで、みんな東京の私立の大学へ行くというんです。要するに理科系に行ける者も文科系の大学へ入ってしまうということで、だんだん地方の大学がまず駄目になってきている。われわれがあんまりそういう情報を知らされていないから、日本の技術はすごいんだ、このまま行くんだと思っている。しかしパテントの問題など出てくると直ぐにガタンときて、下手すれば昭和三十年代のようにインチキな会社が出てきて、東洋電気製造みたいな偽カラー・テレビ問題が起らないとも限らない。それぐらい脆弱なところに立っていると思うんです。

大原 その話はわかりましたけど、また別な見方もあります。結局ミノルタが引っ掛かったのはかなり前のパテントで、その頃はこういうパテントあること知らずに、同時進行で研

究し、生産してきたのがようやく今になってわかったという面がある。あるいは今頃になって日本の産業を叩く目的でアメリカがしかけてきたという面もあって、その後の、例えば七〇年代から八〇年代以降の特許についても、ミノルタと同じようなことになるかどうかは別だという見方もある。仮にそういうようなことがあるとしても、今ここで議論してるのは、それを留保しながらも、日本人が新しいものに対する旺盛な好奇心を持ち、短期間で質的にも量的にも拡大生産してきたその日本人の体質はいったい何かということではないか。

長谷川 今のお話ちょっとまとめてみると、つまり若い人たちにどういふうに教育していかなければならないかという点から言うと、いつも危機感を絶やさないようにするというのは非常に大事なことです、安心してはいられないぞという。それと同時に誇りを与えるということも非常に大事なんです。今おっしゃったような話題についても、バランスが難しいのは、確かにあんまり日本はいいぞいいぞと言いつ過ぎると若い人たちは、じゃあ自分は大学時代スキューバ・ダイビングだけしていいだろうという安心感のほうに引きずられていってしまう。だからといって、あんまり日本の大衆は駄目だ駄目だと言うと、今度は、じゃあ自分もどうせダメなんだろう、と投げてしまう。何しろ本当に若い人間たちというのは、いろんな宣伝文句にあれこれ右往左往してる世

代なんです。だからわれわれとして難しいのは、彼らに誇りを与えながら、しかも危機感を絶やさないようにする。そのために正しい情報をどう与えていかなくちやならないかということだと思えますね。

そういう実際的な面から言うと、確かに今おっしゃったように、パテントの問題というのは今もこれからも日本の直面していく難しい問題で、アメリカからの嫌がらせとしてのパテント訴訟というのは、今ものすごく増えています。それからアメリカで訴訟と裁判が行われると必ず敗訴する。そういう形でこれから日本バッシングの多分最大の柱の一つになるだろうという、そういう難しい、警戒しなければならない問題ですね。ただ、パテント全体の量からいくと、日本の特許申請というのは、確かにぐんぐんこの十年間伸びていて、数字からいっても十年前と比較にならないような数になってる、ということも事実なんです。だから両面―誇りと危機感と、両方の手綱をしっかり取ってなきゃいけないということじゃないかと思えますけど。

寺田 今のカメラの問題で言うと、ハネウエル社の特許というものだけでは、実際ああいふカメラは作れない、物を作るといふ技術としては非常にブリミティブなものでしかないんだという説もあります。しかもそれが特許に抵触するかどうかということとは、そこで本訴をやめてしまったし、しかも

技術のわかる者が判断したんじゃないなくて陪審員ですから、なかなか難しい問題もありますね。

司会 私が言いたかったのは、まさにそういうことで、古来からいろんな技術を取り入れて、現実に応用して、特許侵害云々は別としまして、いろんな物を作り出してきた。確かに明治維新以降も官営の製糸工場を造って、明治の末年には世界最大の、絹を作るようなぐらゐの技術を持つようになったわけです。それはそれでいいんですけど、戦後またそれと同じようなことをやり始めて、知らない間にいろんな国民が全部努力して、こういう国をつくったと、これだけ豊かになったと。いったいあるものを取り入れて、それを技術改良して何か製品を作る。どんどん日本だけじゃなくて、世界へどんどん出していく。結果としては黒字になって豊かになってくる。

しかし果たしてそれがいったい、もともとの原理的な意味でいったいどういう意味を持つてるのかという問い掛けというのが、私自身明治維新以降のそういう歴史をちょこっとかじってまして、確かに戦前は先程おっしゃったように富国強兵という一つの目的があった。しかし富国して強兵にしたからといって、いったいその次は何をしようかと思つた時には、ある意味じゃまさに端的に現れているのは、明治の末年ぐらゐから実際にはほとんど、その頃の内務省の連中也知ってい

ますが、とてもイギリスにはかなわない、とてもアメリカにはかなわないと、ものすごい冷徹な認識があったんですね。ところが国民には富国強兵で日本は一等国になったと説き、国民もそう思つてしまった。現実には世界を客観的に見、計るという窓口がほとんどなくなってしまった。ある程度高級官僚はきちつとしてた、柳田さんなんかもういう点はかなり抑えてた、だから常民は貧しい貧しいということを強調したわけです。

それと同じようなことが現代も、何となく確かにGNPがどうだとか、輸出黒字と言つてますけど、技術も勝ったとか言つてますけれども、しかし結果的にはそれがいったい何のためなのか、いったい本来何を求めているのか、何のためにこうやって取り入れてやってきたのかという意味での、教育においても社会においても、あるいは家庭においても、あるいはこういう一種の学者のレベルとか研究者のレベルにおいても、ほとんどこういう質的なラジカルな問題が全然問ひ正されないままに、逆に時代風潮へ荷担するような形で、日本は今まで努力してきたんだ、日本人は優秀なんだというのがあまりにもあり過ぎる。それに対して、それほどアメリカにしたつて見下げたもんじゃないし、ヨーロッパにしたつてイギリスにしたつて、斜陽大国だとか言われているけれど、それは今の現象だけで計つてしまっているの、それはおかし

いんじゃないかなと思うわけです。

大原 それはそうだと思いますよ、栄枯盛衰は時の流れだし、日本が抱えているさまざまな問題も少なからずあると思いますよ。

日本とは何か

司会 寺田さんがおっしゃった、日本とは何かという問題です、要するに。

大原 だから、日本とは何かという最初の問題にかえるわけですが、その前に、近代化とは何かという根源的な問い掛けがあるはずでしょう。「近代化」を端的に定義するならば、「欧米で発達した技術や制度、思想を取り入れて、貧困と無知と疾病を克服する」ということになるでしょう。今だってそれは発展途上国に通用することなんです。しかし、日本がこれほど豊かになっても、従来のままこの延長線に進むことではないのかということが問い直されているとすれば、近代化そのものを総括しなければならぬ。それはそれで大事なテーマだと思うけれど、それをここでそこまで……。

司会 基本的に出発点に問題が返ってきたような気がします。今までお話をいただいたことを振り返ってみて、こういうことは落ちてないか、あるいは私は私はいくうふうに考えているんだということを、お三方にお話をいただいて、締め括らし

ていただきたいと思いますが。

長谷川 私は今の阪本さんのお話に関連してるんで、それを最後の締め括りにさせていただきたいと思うのですけれども。今阪本さんがお聞きになった質問が、一番大事な疑問点だと思うのです。つまり何のためにということです。「何のために」とおっしゃったとき、多分阪本さんは、何か先のほうにゴールがある、あるいはあるに違いないという形でお聞けてきて、日本もあとからその先のほうにある何かのためにやってきたような気がするけれども、果たしてそんなものがあるのか、で、それは何なのかという、そういうお尋ねだろうと思うのです。

私はまさに、そういう何か先のほうにあるに違いないという期待そのものがまさに近代化の幻想そのものなんじゃないかと思うのです。しかし、歴史全体を幻想のない目で眺めてみると、近代化のプロセスというのは、実際には、何かあるものを目指してそれを達成するというプロセスではなくて、むしろあるものが何かが壊れていって、そうして壊れた結果流れ出した雪崩とか、大水とか、そういうものがどんどん勢いを増して流れ続けていくというプロセスではなかったか、というのが、私自身の認識なんです。これは一見（流れて動

いてますから）一種の競争のような形を取ってるようにも見えるわけで、近代化競争という形で先進国が流れの最先端を競って走って行くわけです。豊かさというものを求めているように見えたり、人間の平等ということを求めているように見えたり、長寿を求めているように見える。しかし、実は、何か人間の生活を根本的につくっていたもの―例えば、各々がそのところを得るといふ、そういうような形で出来上がっていた秩序が壊れた結果の、止むに止まれぬ落下競争のようなものだったんじゃないかと思うのです。

ですから日本とは何かということを考えることによって、日本自身がアイデンティティーをとりもどすというだけでは。そのことによって近代の歴史全体を批判し直す一つの視点を得るといいますか、そういう意義もあるのではないかと思うのです。その結果、今ちょうど阪本さんがおっしゃったように、じゃあ日本の明治以来の近代化の歴史はいったい何だったのか、ということに対する一つの答えも、たぶん出てくるのではないかなという気がしているんです。

大原 今のお話も同感するところが多いのですが、やはり明治維新以来の日本の開国と近代化は、途中戦争という事態がありましたけれども、その路線は今日も続いてきている。冒頭申し上げましたように、日本が建国以来二千有余年の歴史の中で、日本人がこの国が豊かであることを初めて認識し

た、そういうふうに見える人々が、国民の中のかんりの比率を占め、二十一世紀はそういう方々が国を担うことになる。

そういう時に日本のアイデンティティーはいったい何ぞやということを考えるに当たって、一方ではこうして勤勉に、経済的にうまくやってこられた面を、おだてることも必要でしょうが、一方ではそこに限界があり、放置しておくとか致命的な事柄につながりかねない要素があることを指摘して、国に誇りというものをやはり持たせるためにどうしたらいいかという、大変難しい問題がある。

ここで話は飛びますが、さきほど憲法問題に少し触れました。それは主として九条の問題に限られていましたが、やはり前文に描かれているアメリカの「独立の宣言」やなんかの寄せ集めのような、しかし、普遍的な原則だといわれているものに代わるものがあるのか、という点について考えてみたい。十年ほど前、もう亡くなりましたけれども、当時栄光学園の校長をしていたグスタフ・フォスというカトリックの神父さんの話を聞いたことがあります。日本の憲法のことについていろいろ話されたあと、「あの前文は日本の伝統から生まれたものではない。やはり日本の伝統に合うものにするべきだ」ということで、「例えば『教育勅語』のようなものを憲法の前文のところに置いたらどうなんですか。』」と言われた。カトリックと言えは「普遍的」という意味ですから、

その神父さんがそういうことを言われたことに少々驚きました。

周知のように、「教育勅語」を起草した井上毅は、既存の宗教や、哲学や、政治思想に偏らず、日本人の万人が万人とも肯定できるようなものとして構想したので、そこには特定のドグマではなく、むしろ日本人の長い歴史の中で培われた日本人の歴史観や倫理感がバランスよく構築されていると思います。「教育勅語」の文体は漢文書き下し調ですから、いかにも儒教的色彩が濃いような印象を与えますが、もしこれを「軍人勅諭」のように大和言葉で書かれたならば、恐らく儒教臭は消えてしまうだろう。かつて文部省がやったように英訳、独訳、仏訳すれば、そういう印象はもっと薄くなってしまうだろう。恐らくグスタフ・フォスさんは、日本語も外国語も達者な方ですから、日英どちらもお覧になったと思いますけれども、いかにも日本固有の精神の表現であるかのように見えながら、同時にそれは普遍性に通じる内容を持っているということを感じられたのではないだろうか。

戦前は「教育勅語」を神棚に上げて、ただそれを暗唱しておればよろしいということであった。戦後はそれが引っくり返って、過去の遺物に過ぎない、前近代的な天皇絶対主義のドクトリンであると言われてきましたが、今一度「教育勅語」の中身を真面目に見れば、そこに先程申し上げたような、

「各々其ノ所ヲ得ル」に通じる思想がこめられているわけでしょうし、それがまたグスタフ・フォスさんが評価したように、普遍性にも通じるものがあるんじゃないか。戦後思想を考えていく上で、新しい視点が出てくるのではないかという気がします。

寺田 先程阪本さんのお話しになったことは、要するに日本人が経済的な成功に気をよくして、傲慢になっているんじゃないかということだと思いますが、私は逆にまだ日本人が混乱の中にいて、非常に自信を持ってない状態にいます。そうして、その辺は認識に違いがあります。そういう意味で自分たちがこれからどうしていくか、何をすればいいのかを考えるために、歴史に学ぶという意識が必要なのではないかと思っています。天の命ずるこれを性と言い、性にしたがうこれを道という儒学の方で言いますが、それぞれの道を歴史の中から見つけて行けるのではないかと淡々と考えております。

司会 私自身は必ずしも同じ認識を持つ必要はないと思うのですが、寺田さんの今おっしゃったことというのは、私とある意味じゃ表と裏、同じことだというような気がするんです。

私は自信を、混沌の中からある秩序を生み出す、あるいは混沌の中においてもある一つの自信を持つてるということ、

これは同じことだと思うのです。私はそれがいいままに豊かである、エリック・ホッファが言う意味での自尊心ではなくてプライドですね、外からつけられたようなもの、それでもって外へ出て行く、国民が行動する。いざ、本当にきちっとした対応をしなければならぬ時には、先程から話題になつてる湾岸戦争とか、今度のPKOみたいな、あっちへいったらフラフラ。私はそのいやらしさを世界中が物笑いにするだけならいいんですけれど、アメリカみたいにさっきのミノルタじゃないですが、そこを突いてくる。非常にいやらしく。私はそれに対してすら、ちゃんとした抵抗、あるいは対応をしないで、金さえ払えれば、要するにまあまあやっていけばこれでいいんじゃないかという、今の状況に対する認識を述べたわけです。

寺田さんがおっしゃる本当の意味での自信といえますか、そういうものが私自身大原さんとその点では違うような気がします。大原さんがどういうお考えかをお聞きしたいんですけれど、明治維新以降「教育勅語」のあの時点、あるいはあの「教育勅語」で育った世代自体が、真のものとしてあの「教育勅語」を持たなかった、本当に鼻すすりながらしょうがないからこうやって聞いてたというんです。私の父とかお袋なんかも聞きましたけれども。何か本当の意味での「教育勅語」を見直すとか、あるいは戦前においてもそれがなされ

なかった。それがまたぞろ同じような感じでズルズルきてるんじゃないか。だからこそ敗戦という大きなものすごい、未曾有の一種の国難とか、断絶みたいなのがあったと思うのですけれど、基本的な精神構造というのは、あるいは社会の意識というものは、さほど変わってない。

一つだけ最後に例を挙げますが、先程受験の問題とか、あるいはいろんな問題が出ましたけれども、これは前に発表したことありますが、明治二十年代、三十年代からものすごい競争。久米正雄の『学生時代』なんかお読みになったらわかりますように、ある意味では今よりもっと厳しい、そういう意味じゃ少ないだけに凝縮されたものすごい厳しさがあった。それが戦後は拡大してしまった。構造としては日本人のそういう意味でのメンタリティーとか社会意識というのが、何となく一遍反省したり、もう一度振り返る、それこそ自分の得るところは何なのかという、その反省がないままに、何かどんどんまた突っ走ってきたように思われる。それが今寺田さんがおっしゃった意味での、自信のなさとながっている。常に自制をするということをして来なかったから。

非常に日本人をけなしたりしているわけですが、実は誇りを持たせるために、あるいは本当に誇りを持たなければならぬからこそこういうことを言ってるわけで、今の日本が駄目だとか、けしからんとか、どうしようもない民族だという

ふうなつもりで言ってるのではありません。そろそろ約一世紀以上たったんですから、もう一度明治以来の、敗戦を挟んで今日のテーマのようなことを、本当にこの雑誌をお読みになる神主さんとか、日本文化とか日本精神というものを一番大事にしておられる、あるいは声高に叫んでおられる人々にこそ、私は本当にもう一遍考えていただきたい。そうでないとやっぱり駄目じゃないかなあとという気がしてしょうがないんです。

大原 確かにその点に同感できるものがありますよ。戦前の教育で「教育勅語」が、一般の国民にどれほど実体化していたかについては、なお検討すべきことがあることは認める。ただ、ここで問題にしたかったのは戦後の支配的な風潮の中でゆえなく「教育勅語」がさげすまれてきて、そのことに對するフェアな評価すらなされてないという現状です。そのことを僕は考えたい。

長谷川 それともう一つその話に付け加えたいのは、つまり教育というのはそういうものなんです、訳もわからずに、ただ、早く終わるといいなあと思いつながら聞いていることが、何かの形で沈潜して、ある必要な時に出てくる。子供に施す教育の大多数がそういう形のものだと思います。ただ、むしろ問題は、それを生かせるようなあり方自体が、戦後に洗われ流されてしまったということだと思います。

それともう一つ、阪本さんが今それを反省し直すのに自制が必要だとおっしゃった。私はむしろ大事なものは日本の外を見ることだと思うのです。つまり明治以来の日本の社会の内側のいろんな変な歪んだ力というのは、必ず外からきてるんです。外からの力が、日本人のもともとのあり方の上に加わってきた結果、いろんな歪みが出てきている。何で日本の内側のいろんなおかしいものが出てきたのかということとは、日本の外を見ることによって初めてわかるという。そのことをこれまでの日本論というのは、しばしば忘れているんですね。ですからそれはこれから忘れないようにしていきたいと思っています。

司会 どうもありがとうございます。思想という問題は、だんだん突っ込めば突っ込むほどいろんな問題が出てくるわけですから、これからまだ一時間でも二時間でも続くと思いますけれども。一般の読者からすると、少しあるいは難しい、難しいなんて言うのとあとで叱られるかもしれない感じが、一緒に本当についていって考えるということとは、なかなか努力がいる問題だったと思います。また改めて個別のテーマを立てて、例えば大原さんが出したような「教育勅語」の問題なんかも考えてみなければならんと思いますけれども。今、少なくとも戦後何回か大きな山があったと思いますけれども、世界の変革、今までに例が見られないぐらいの大きな変動期に

きて、日本人が日本のことをもう一遍本気で考えてみなければならぬということが問われていることは、皆さん認識が共通なんじゃないかと思えます。これは結局ジャーナリズムの世界で本気で議論されることも大切ですし、政治の面で議論されることも、そして教育の面で議論されることも大切な問題で、われわれ一人一人が更にこれを前へ進めていく努力ができれば幸いだ、というような大変お座なりなまとめで恐

縮でございますが、どうも長時間ありがとうございました。

(了)

〔おわび〕 仮名遣いの問題で寺田さんは歴史仮名遣いの意味を強調されており、事実速記録補正の際、すべて歴史仮名遣いに改められています。統一の都合上現代仮名遣いにさせていただきました。心よりお詫び申し上げます。(編集部)

